

平成 23 年度

文部科学省
先導的大学改革推進委託事業

福祉系大学における人材養成機能向上に
関する調査研究

報 告 書

平成 24 年 3 月

社団法人日本社会福祉教育学校連盟

目 次

はじめに	i
第 1 章 「福祉系大学における人材養成機能向上に関する国内調査」	1
第 1 節 調査概要	1
第 2 節 調査結果	4
1. コア・カリキュラム(案)に対する妥当性評価の結果および評価者属性との 関連	4
2. コア・カリキュラム(案)VI群の構成概念妥当性の検討	16
第 3 節 自由記述の分析	28
1. 各群における自由記述の分析	28
2. コア・カリキュラム全般の自由記述の分析	36
第 4 節 考察	41
1. これまでのコア・カリキュラム調査の経過と本調査の意義	41
2. 本調査全体の考察	43
第 5 節 今後の展望と課題	48
＜資料 1＞ 調査票	51
＜資料 2＞ 別紙：コアカリキュラムの詳細	59
第 2 章 「コア・カリキュラムに関する国際調査」	65
第 1 節 調査概要	65
第 2 節 調査結果	66
第 3 節 考察と結論	72
第 4 節 おわりに	75
＜英文報告書＞	76
＜資料 1＞ 英文調査票	93
＜資料 2＞ 和文調査票	97

第3章 コア・カリキュラム検討拡大委員会	103
1. 報告1 日本社会福祉教育学校連盟におけるコア・カリキュラム策定の経過	104
2. 報告2 「福祉系大学における人材養成機能向上に関する国内調査」報告	106
3. 報告3 「コア・カリキュラムに関する国際調査」報告	113
4. 討議	117

はじめに

本報告書は、社団法人日本社会福祉教育学校連盟が2年間にわたり受託した、文部科学省先導的大学改革推進委託事業「福祉系大学における人材養成機能向上に関する調査研究」について平成23年度の研究結果をまとめたものである。

文部科学省先導的大学改革推進事業は、「教育現場の実態に即した新たな教育手法の開発や具体的な導入方法等の先導的調査研究を委託し、これらの成果を今後の国公立を通じた高等教育行政施策の企画立案及び改善に資するとともに、成果を広く公表することにより各大学の取組を支援・促進し、大学改革の一層の推進と教育の質の向上を図ること」を目指すものである。

平成22年度は、社会福祉学教育におけるコア・カリキュラムについて継続的に実施してきた調査研究に関して、本事業の受託により「社会福祉教育モデル・コア・カリキュラム」のより深い定着活用を目的として、モデルとして詳細なコア・カリキュラムを作成した。コア・カリキュラムの内容は、全6群よりなる。Ⅰ群は「社会福祉学」として、3つの部分により構成されている。次いで、この社会福祉学の基礎の上にソーシャルワーク専門職としての実践を展開できる能力をとして5つの群を設定している。即ち、社会福祉専門職の基本にかかわる能力(Ⅱ群)、理論的・計画的なソーシャルワークを展開する能力(Ⅲ群)、多様な利用者への展開能力(Ⅳ群)、実践環境に対応した展開能力(Ⅴ群)、そして実践の中で研鑽・研究できる能力(Ⅵ群)である。これらの群の構成は「ジェネラリスト・ソーシャルワーカー」養成という大学学部段階での目標に相応しいものとして策定している。

平成23年度の研究では、22年度の研究成果を踏まえ、第1に「福祉系大学における人材養成機能向上に関する国内調査」、第2に「コア・カリキュラムに関する国際調査」を実施した。そして、第3に、コア・カリキュラム拡大検討委員会を開催し、調査結果の検討・評価を行った。

第1の「福祉系大学における人材養成機能向上に関する国内調査」は、モデルとして作成したコア・カリキュラムの項目について、その妥当性を全国の連盟加盟校から無作為で抽出した28校316名に対して調査を行った。第2の「コア・カリキュラムに関する国際調査」は、国際ソーシャルワーク学校連盟の加盟理事14カ国18名に対し、各国のコア・カリキュラムの導入状況に関し、調査を行った。

第3のコア・カリキュラム拡大検討委員会における検討・評価では、日本社会福祉教育学校連盟各委員会委員の参加により、第1、第2の調査結果を踏まえ、今後の課題の明確化がはかられた。

日本社会福祉教育学校連盟は、昭和30年に発足して以来、社会福祉学教育研究のナショナル・センターとして、我が国の社会福祉教育の質の向上と、その啓発・普及に取り組んできた。平成22年度、23年度の2年間にわたる「福祉系大学における人材養成機能向上に関する調査研究」により作成・検証されたコア・カリキュラムが、国内及び国際の両視点から、我が国のソーシャルワーク教育とグローバル・スタンダードとの関係性を検証する礎となることができれば幸いである。

本研究の実施にあたり、日本社会福祉教育学校連盟の諸氏、国際ソーシャルワーク学校連盟加盟国の関係者の皆様、国際調査の調整にご協力いただいた日本社会事業大学秋元樹氏に深く感謝申し上げる次第である。

本調査研究に関わった委員は下記の通りである。

野村 豊子（東洋大学）	社会福祉専門教育委員会委員長
平塚 良子（大分大学）	社会福祉専門教育委員会
池田 雅子（北星学園大学）	〃
北島 英治（日本社会事業大学）	〃
白川 充（仙台白百合女子大学）	〃
賛川 信幸（日本社会事業大学）	委員会ワーキンググループ
照井 孫久（東北公益文科大学）	〃
阪口 春彦（龍谷大学短期大学部）	〃
山口 友佑（東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科）	研究協力者
野崎 瑞樹（東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科）	〃
藤林 慶子（東洋大学）	日本社会福祉教育学校連盟事務局長
高山恵理子（上智大学）	日本社会福祉専門教育委員会事務局

平成24年3月

社団法人 日本社会福祉教育学校連盟
社会福祉専門教育委員会委員長 野村豊子

第 1 章「福祉系大学における人材養成機能向上に関する国内調査」

第 1 節 調査概要

1. 調査の目的

本調査は、社団法人日本社会福祉教育学校連盟（以下、学校連盟）が作成してきた「社会福祉を基礎とするソーシャルワーク教育コア・カリキュラム（案）」（以下、コア・カリキュラム（案））の妥当性の検証、および、コア・カリキュラム（案）改訂のための意見収集を目的として行った。

コア・カリキュラムは、学校連盟に入会する学校に共通して求められる教育目標とその到達過程としての教育項目のミニマム・スタンダード、すなわち学校側が最低限抑えるべき教育内容を指す。コア・カリキュラムは 2005 年度より学校連盟において議論を重ね、6 大項目（群） - 18 中項目 - 60 細項目からなるコア・カリキュラム（案）が作成された（表 1）。

上記の過程を経て作成されたコア・カリキュラム（案）に対して、学校連盟会員校の教員からより広く意見を集めることにより、その内容的妥当性を確認することや、より妥当性の高いコア・カリキュラムへ改訂することが可能になると考えられる。

2. 調査の方法

(1) 対象

本調査の対象は、まず、学校連盟の正会員校 142 校から 2 割に相当する 28 校を無作為に抽出した。そのうえで、抽出された 28 校において社会福祉の教育に関わっているすべての常勤の教員を対象とした。

28 校の抽出には、地域と規模の 2 段階化抽出法を用いた。すなわち、会員校の所在地域（東日本／西日本）および規模（会員単位〔学部・学科等〕の全学生数 200 人以上／未満）で層化し、4 カテゴリーそれぞれで 2 割を無作為に抽出した。表 2 に、各カテゴリーの学校数（母数）および抽出した学校数を示した。この手順で抽出された 28 校において、調査対象に該当する教員は 316 名であった。

表 1. コア・カリキュラム（案）の群および中項目の構成と内容

群	中項目
I 群：社会福祉学	1. 社会福祉概念の定義・内包・外延およびその概念に関する理論的立場を表示するもの, 2. 社会福祉制度・政策領域, 3. 社会福祉の歴史
II 群：社会福祉専門職の基本に関わる実践能力	1. 人の尊厳と人権擁護を基本に据えた実践能力, 2. 利用者の意思決定を支援する実践能力, 3. 社会正義に基づいて広範な視野を有する実践能力
III 群：理論的・計画的なソーシャルワークの展開能力	1. ソーシャルワークの理論やソーシャルワーク実践モデルを駆使したソーシャルワーク展開能力, 2. 対象のレベル（個人・家族・集団・組織・地域・制度など）に対応したソーシャルワーク実践能力, 3. ソーシャルワーク基本技術群及び多様な介入レパートリーを有した確実な実践能力
IV 群：多様な利用者へのソーシャルワークの展開能力	1. 社会福祉の対象とその変化に対応したソーシャルワーク展開能力, 2. 人間の発達段階を理解しそれに対応した多様なソーシャルワーク展開能力, 3. 問題群に対応した多様な利用者へのソーシャルワーク展開能力, 4. 対象が生み出される仕組みへの理解に基づく、利用者に適した理論的アプローチによるソーシャルワーク展開能力, 5. 多様な生活の場に対応したソーシャルワーク展開能力
V 群：実践環境に対応したソーシャルワークの展開能力	1. 多様な実践の場の理解と場にふさわしいソーシャルワーク実践能力, 2. 他職種・機関と連携できるソーシャルワーク展開能力
VI 群：実践の中で研鑽・研究できる能力	1. ソーシャルワーク実践に関わる情報活用能力 2. ソーシャルワーク実践の中で研鑽を深め、研究できる能力

註：細項目は多岐に渡るため、結果の表で示した。

(2) 手続き

調査は無記名の自記式調査により行った。無作為に抽出された会員校 28 校に対し、会員校の学校連盟担当者に調査の趣旨を説明し協力を求めた。担当者より該当教員に調査票が配布され、該当教員は回答後、回収用封筒に厳封して担当者に提出し、担当者は回収済み調査票を開封せずにとりまとめて返送した。

調査は、平成 23 年 11 月から平成 24 年 1 月の期間に行われた。

(3) 調査票

①コア・カリキュラム（案）に対する認識

コア・カリキュラム（案）の中項目、細項目を提示し、各項目をコア・カリキュラムに

位置づけることに対する妥当性の認識について回答を、「1. まったく妥当ではない」、「2. あまり妥当ではない」、「3. どちらとも言えない」、「4. まあ妥当である」、「5. 非常に妥当である」の5件法により求め、選択肢に付した数字を得点として用いた。それぞれ、得点が高いほどその中項目および細項目がコア・カリキュラムとして妥当であると認識していることを表す。

調査票では、選択肢による妥当性の評価に加えて、群ごとに自由記述欄を設け、各群の項目のコア・カリキュラムとしての妥当性について意見を求めた。

②基本属性・背景情報

回答者の基本属性および背景情報について回答を求めた。回答を求めた内容は、a) 担当している資格養成（複数回答あり）、b) 社会福祉関連科目担当歴、c) 学問的背景（複数回答あり）、d) 保有資格（複数回答あり）、e) 大学院担当の有無、f) 各群が表す内容の関連科目教育への関与の有無（I～VI群のそれぞれについて回答を求めた）、であった。

(4) 分析

まず、コア・カリキュラム（案）への妥当性認識の各回答結果を妥当性得点として集計し、その特徴を記述的にまとめた。加えて、妥当性認識の各回答結果と基本属性・背景情報との関連の有無を検討した。さらに、群－中項目－細項目の構成概念妥当性を検討するため、細項目間、中項目の相関分析および共分散構造分析を行った。

表 2. 地域及び学校規模別の学校連盟会員校数および各カテゴリからの抽出校数

		学校規模		計
		大規模	小規模	
地域	東日本	49 (10)	34 (7)	83 (17)
	西日本	27 (5)	32 (6)	59 (11)
	計	76 (15)	66 (13)	142 (28)

註) 上段：各カテゴリに含まれる学校数／（下段）：無作為抽出した学校数

第 2 節 調査結果

26 校の合計 181 名の教員から回答が得られた（回収率：57.3%）。回答者の基本属性を表 3 に示した。社会福祉士資格養成を担当している者，社会福祉学を学問的背景に持つ者が回答者の大部分を占めたが，社会福祉士の資格を有する者はと約半数であった。大学院を担当している者は約 4 割であり，社会福祉関連科目の担当歴の中央値は 9 年であった（範囲：0～37 年）。

1. コア・カリキュラム（案）に対する妥当性評価の結果および評価者属性との関連

1) コア・カリキュラム（案）に対する妥当性得点

中項目および細項目それぞれの妥当性得点を，群ごとに表 4-1 から表 4-6 に示した。また，群，中項目それぞれを構成する細項目の妥当性得点を用いて算出した群，中項目の項目平均得点を表 4-7 に示した。

すべての中項目および細項目の平均値が 4 点以上であった。また，項目平均得点においてもすべての群および中項目の平均値が 4 点以上であった。平均値と標準偏差から，ほとんどの群，中項目，細項目において，天井効果が認められた（平均値 + 1 標準偏差 > 5 点）。しかし，I 群の細項目「国際的側面」，「語られる（記述される）歴史の側面」（表 4-1），IV 群の細項目「時代区分と対象論」，「福祉制度論と「対象論」の位置関係の把握」，「ライフイベント概念の把握」，「生活における転居・移行の概念と実態の把握」（表 4-4），VI 群の細項目「研究の理解と研究手続き・手順の把握と実行力」（表 4-6）の 7 項目においては，天井効果は認められなかった。

また，項目平均得点では，IV 群の中項目「社会福祉の対象とその変化に対応したソーシャルワーク展開能力」，VI 群の中項目「ソーシャルワーク実践の中で研鑽を深め，研究できる能力」，および VI 群「実践の中で研鑽・研究できる能力」において天井効果は認められなかった（表 4-7）。

図 1-1 および図 1-2 に，各細項目における回答選択肢の選択割合を示した。ほとんどの項目において「4. まあ妥当である」と「5. 非常に妥当である」を選択した者が回答者の 80% 以上を占めた。これら選択肢を選択した者が 80% に満たなかった細項目は，妥当性得点において天井効果が認められなかった細項目とほぼ一致していた。

表 3. 調査回答者の基本属性

基本属性	n	(%)	M ± SD
担当している資格養成 ^a			1.4 ± 0.7
社会福祉士	158	(87.3)	
精神保健福祉士	38	(21.0)	
介護福祉士	36	(19.9)	
保育士	12	(6.6)	
上記の担当なし	9	(5.0)	
社会福祉士のみ	99	(55.0)	
学問的背景 ^a			1.2 ± 0.5
社会福祉学	145	(80.1)	
医学	2	(1.1)	
看護学	5	(2.8)	
介護学	11	(6.1)	
心理学	9	(5.0)	
保健学	3	(1.7)	
その他	33	(18.2)	
社会福祉学のみ	121	(68.0)	
保有資格 ^a			0.9 ± 0.9
社会福祉士	89	(49.2)	
精神保健福祉士	21	(11.6)	
介護福祉士	17	(9.4)	
保育士	6	(3.3)	
医師	1	(0.6)	
看護師	7	(3.9)	
その他	27	(14.9)	
なし	57	(31.5)	
社会福祉士のみ	53	(30.8)	
大学院担当あり	69	(38.1)	
社会福祉関連科目担当歴 (年)			10.5 ± 7.0
パーセンタイル値 (25%ile)	5		
パーセンタイル値 (50%ile)	9		
パーセンタイル値 (75%ile)	15		
範囲(最小値－最大値)		(0 - 37)	

^a 中括弧の中で複数回答あり

M 平均, SD 標準偏差

表 4-1. 「I 群：社会福祉学」に対する妥当性得点

中項目	細項目	妥当性得点		
		n	M	± SD
1. 社会福祉概念の定義		141	4.65	± 0.67
	① 社会福祉の理念	180	4.62	± 0.81
	② 社会保障・社会福祉の位置づけ	180	4.53	± 0.82
	③ 社会福祉学一般理論・原理論	180	4.46	± 0.89
	④ 社会福祉の主要概念	180	4.49	± 0.82
	⑤ 社会福祉における実践主体	178	4.45	± 0.82
2. 社会福祉制度・政策		134	4.54	± 0.68
	① 社会福祉制度の概念	178	4.53	± 0.75
	② 社会福祉関連法	179	4.47	± 0.80
	③ 社会福祉制度を生み出す仕組み・要因	179	4.42	± 0.82
	④ 非公的セクターの意義と仕組み及び機能	179	4.20	± 0.84
	⑤ 国際的側面	177	4.07	± 0.91 a
3. 社会福祉の歴史		130	4.55	± 0.72
	① 社会福祉において「歴史」を学ぶ意義の把握	180	4.48	± 0.86
	② 現代の社会福祉を理解・把握するための視点からの逆照射	178	4.37	± 0.79
	③ 語られる(記述される)歴史の側面	175	4.06	± 0.91 a
	④ 歴史における比較の視点	176	4.22	± 0.86

M 平均値, SD 標準偏差

^a M+1SD < 5.0

表 4-2. 「II 群：社会福祉専門職の基本に関わる実践能力」に対する妥当性得点

中項目	細項目	妥当性得点		
		n	M	± SD
1. 人の尊厳と人権擁護を基本に据えた実践能力		143	4.69	± 0.62
	① 基本的人権概念の把握	180	4.61	± 0.82
	② 人権侵害概念と侵害状況の把握	180	4.52	± 0.84
	③ 人権擁護概念と擁護方法の把握	180	4.56	± 0.79
2. 利用者の意思決定を支援する実践能力		141	4.65	± 0.63
	① 意思決定の概念の意味と意義の理解	180	4.59	± 0.81
	② 権利としての意思決定の法的、倫理的根拠	180	4.51	± 0.81
	③ 「能力論」と能力支援の意味の方法	180	4.22	± 0.89
3. 社会正義に基づいて広範な視野を有する実践能力		141	4.44	± 0.86
	① 正義及び社会正義の概念の把握	178	4.35	± 0.95
	② 正義の下位概念の把握(自由・平等)	178	4.29	± 0.96
	③ 反正義状況の把握	178	4.15	± 0.96

M 平均値, SD 標準偏差

表 4-3. 「Ⅲ群：理論的・計画的なソーシャルワークの展開能力」に対する妥当性得点

中項目	細項目	妥当性得点		
		n	M	± SD
1. ソーシャルワークの理論や実践モデルを駆使した展開能力		138	4.53	± 0.70
	① ソーシャルワークの一般モデル	177	4.38	± 0.83
	② ソーシャルワーク理論の歴史	177	4.34	± 0.85
	③ ソーシャルワークの実践モデル/アプローチ	177	4.38	± 0.82
	④ ソーシャルワークの一般的展開(過程)モデル	177	4.46	± 0.76
2. 対象のレベルに対応したソーシャルワーク実践能力		137	4.58	± 0.64
	① ソーシャルワークの対象レベルの捉え方	177	4.41	± 0.84
	② 各レベルの対象特性の把握	177	4.38	± 0.86
	③ レベル特性に対応するソーシャルワーク技術特性の把握	177	4.32	± 0.86
3. ソーシャルワーク基本技術群及び多様な介入レパートリーを有した実践能力		135	4.56	± 0.69
	① ソーシャルワークの基本技術の把握と実行力	175	4.45	± 0.84
	② ソーシャルワークの「方法」概念	173	4.42	± 0.82
	③ 関連技術群の把握と実行力	175	4.29	± 0.87

M 平均値, SD 標準偏差

表 4-4. 「Ⅳ群：多様な利用者へのソーシャルワークの展開能力」に対する妥当性得点

中項目	細項目	妥当性得点		
		n	M	± SD
1. 社会福祉の対象とその変化に対応したソーシャルワーク展開能力		136	4.46	± 0.74
	① 社会福祉における対象の理解	179	4.51	± 0.81
	② 対象の変遷への理解	178	4.25	± 0.81
	③ 時代区分と対象論	177	4.02	± 0.87
	④ 福祉制度論と「対象論」の位置関係の把握	179	4.04	± 0.84
2. 人間の発達段階を理解しそれに対応した多様なソーシャルワーク展開能力		136	4.37	± 0.77
	① ライフサイクル・ライフコース・ライフステージ・生涯発達等の概念の把握	178	4.28	± 0.81
	② 発達課題・生活課題概念と、課題分析の方法と理解	178	4.28	± 0.87
	③ ライフイベント概念の把握	178	4.07	± 0.87
3. 問題群に対応した多様な利用者へのソーシャルワーク展開能力		139	4.50	± 0.78
	① 伝統的問題群の理解と対応法の把握	178	4.42	± 0.86
	② 新問題群の理解と対応法の把握	178	4.36	± 0.96
4. 利用者に適した理論的アプローチによるソーシャルワーク展開能力		138	4.48	± 0.77
	① 支援の対象となる分野を理解する	176	4.38	± 0.85
	② 伝統的問題群および新問題群にある利用者に対応するための理論的アプローチの把握	177	4.36	± 0.90
	③ 社会福祉における利用者および対象認識	173	4.35	± 0.87
5. 多様な生活の場に対応したソーシャルワーク展開能力		139	4.29	± 0.81
	① 生活における居住環境と各環境の生活の構造の把握	178	4.20	± 0.87
	② 生活における転居・移動・移行の概念と実態の把握	178	4.05	± 0.92
	③ 生活の場に応じたソーシャルワークの実践方法の把握と実行力	178	4.26	± 0.89

M 平均値, SD 標準偏差

^a M+1SD < 5.0

表 4-5. 「V 群：実践環境に対応したソーシャルワークの展開能力」に対する妥当性得点

中項目	細項目	妥当性得点			
		n	M	±	SD
1. 多様な実践の場の理解と場にふさわしいソーシャルワーク展開能力		138	4.38	±	0.86
	① ソーシャルワーク実践の場の理解と実践方法の把握	177	4.29	±	0.91
	② 実践の場の組織構造特性	178	4.15	±	0.92
	③ 組織構造におけるソーシャルワーカーの位置・地位と実践の特徴	178	4.15	±	0.95
2. 他職種・機関と連携できるソーシャルワーク展開能力		139	4.50	±	0.82
	① 連携・協働・チームアプローチ・ネットワーキング概念の把握と実践方法の理解と実行	178	4.44	±	0.86
	② 施設・機関における組織内職種構成とその連携の実態の把握	177	4.37	±	0.90
	③ 施設・機関の組織外施設・機関とその連携の実態の把握	177	4.36	±	0.89

M 平均値, SD 標準偏差

表 4-6. 「VI 群：実践の中で研鑽・研究できる能力」に対する妥当性得点

中項目	細項目	妥当性得点			
		n	M	±	SD
1. ソーシャルワーク実践に関わる情報活用能力		138	4.25	±	0.84
	① 情報活用に関わる情報リテラシーの理解と実行力	179	4.17	±	0.91
	② 情報の比較対照・検討能力	179	4.11	±	0.92
	③ プレゼンテーション能力	179	4.11	±	0.95
2. ソーシャルワーク実践の中で研鑽を深め、研究できる能力		137	4.17	±	0.86
	① 実践水準の概念及び実践水準の把握方法の理解	178	4.04	±	0.96
	② 自己研鑽・外部研鑽機会の活用	179	4.04	±	0.98
	③ 研究の理解と研究手続き・手順の把握と実行力	179	4.01	±	0.93 a

M 平均値, SD 標準偏差

^a M+1SD < 5.0

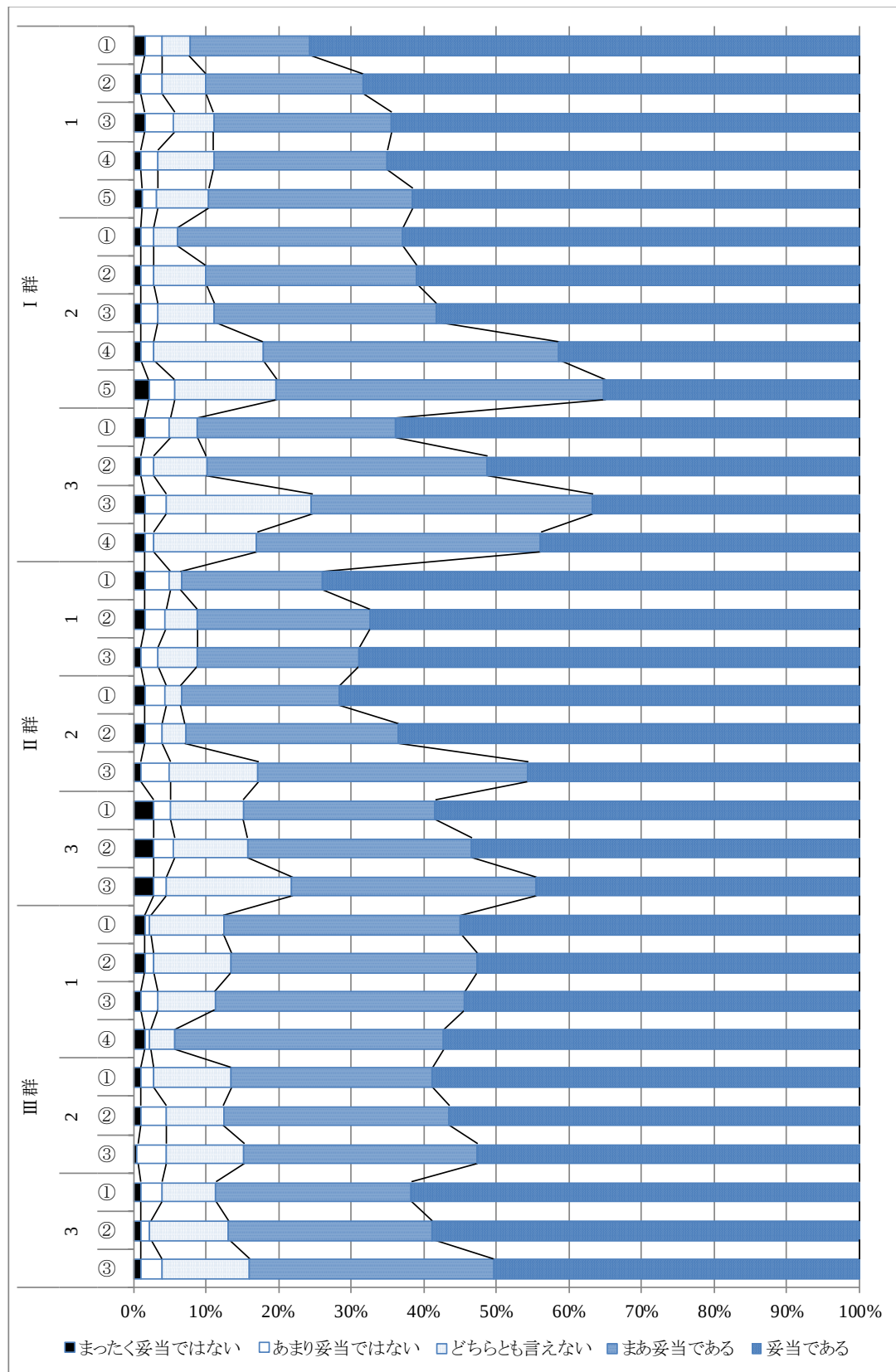
表 4-7. 群および中項目に対する妥当性得点の項目平均

群	中項目	妥当性得点 [†]		
		n	M	± SD
I 群: 社会福祉学		180	4.40	± 0.68
	1. 社会福祉概念の定義	180	4.52	± 0.75
	2. 社会福祉制度・政策	179	4.36	± 0.70
	3. 社会福祉の歴史	180	4.31	± 0.75
II 群: 社会福祉専門職の基本にかかわる実践能力		180	4.45	± 0.75
	1. 人の尊厳と人権擁護を基本に据えた実践能力	180	4.56	± 0.76
	2. 利用者の意思決定を支援する実践能力	180	4.45	± 0.73
	3. 社会正義に基づいて広範な視野を有する実践能力	179	4.30	± 0.89
III 群: 理論的・組織的なソーシャルワークの展開能力		177	4.41	± 0.70
	1. ソーシャルワークの理論や実践モデルを駆使した展開能力	177	4.41	± 0.73
	2. 対象のレベルに対応したソーシャルワーク実践能力	177	4.40	± 0.79
	3. ソーシャルワーク基本技術群及び多様な介入レパートリーを有した実践能力	176	4.41	± 0.79
IV 群: 多様な利用者へのソーシャルワークの展開能力		179	4.28	± 0.72
	1. 社会福祉の対象とその変化に対応したソーシャルワーク展開能力	179	4.24	± 0.74 ^a
	2. 人間の発達段階を理解しそれに対応した多様なソーシャルワーク展開能力	178	4.23	± 0.80
	3. 問題群に対応した多様な利用者へのソーシャルワーク展開能力	179	4.41	± 0.86
	4. 利用者に適した理論的アプローチによるソーシャルワーク展開能力	179	4.67	± 0.83
	5. 多様な生活の場に対応したソーシャルワーク展開能力	179	4.19	± 0.85
V 群: 実践環境に対応したソーシャルワークの展開能力		178	4.31	± 0.83
	1. 多様な実践の場の理解と場にふさわしいソーシャルワーク展開能力	178	4.22	± 0.88
	2. 他職種・機関と連携できるソーシャルワーク展開能力	178	4.40	± 0.86
VI 群: 実践の中で研鑽・研究できる能力		179	4.10	± 0.85 ^a
	1. ソーシャルワーク実践に関わる情報活用能力	179	4.15	± 0.87
	2. ソーシャルワーク実践の中で研鑽を深め、研究できる能力	179	4.05	± 0.91 ^a

M 平均値, SD 標準偏差

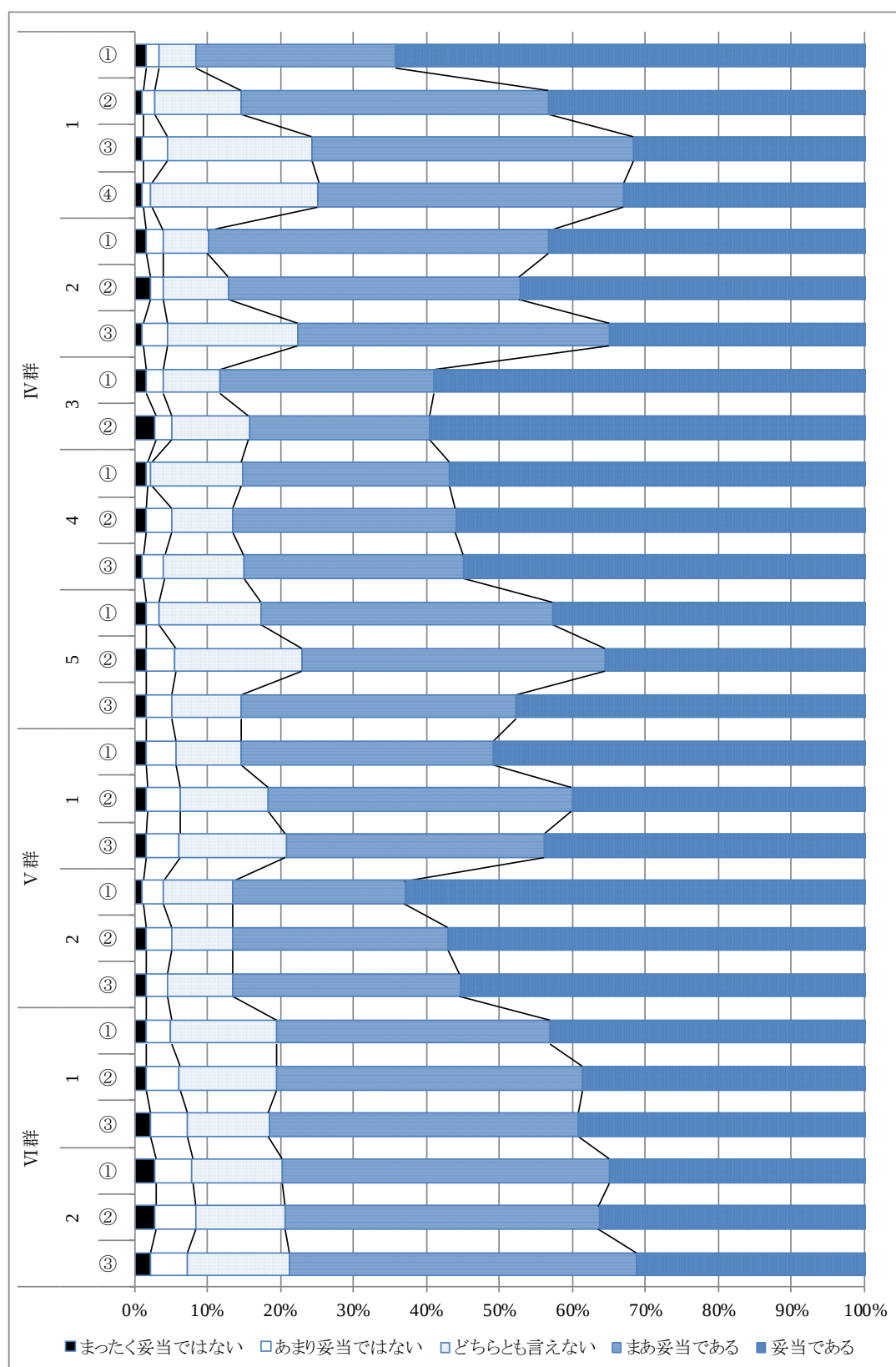
[†] 群または中項目を構成する細項目の妥当性得点から平均値および標準偏差を算出。

^a M+1SD < 5.0



註) 左軸の変数名は左側よりそれぞれ、表 4-1～表 4-3 で示す群、中項目、小項目 (丸付き数字) の番号を表す。

図 1-1. コア・カリキュラムの各細項目に対する回答分布 (I～III 群)



註) 左軸の変数名は左側よりそれぞれ、表 4-4～表 4-6 で示す群、中項目、小項目 (丸付き数字) の番号を表す。

図 1-2. コア・カリキュラムの各細項目に対する回答分布 (IV～VI群)

表 5. コア・カリキュラム（案）の妥当性評価一覧と回答者の属性・背景特性との関連

群	中 項目	細項目	妥当性得点		天井 効果	属性別平均点と推測統計結果 (Mann-Whitney / Kruskal-Wallis [多重比較の結果, a > b])											
			n	M ± SD		当該群教育関与		福祉系担当歴		大学院担当		担当資格養成			学問的背景		
						あり	なし	9年 以下	10年 以上	あり	なし	福祉 のみ	福祉 +	福祉 以外	福祉 のみ	福祉 +	福祉 以外
I 群：社会福祉学																	
		1. 社会福祉概念の定義	180	4.40 ± 0.68													
		① 社会福祉の理念	180	4.52 ± 0.75													
		② 社会保障・社会福祉の位置づけ	180	4.62 ± 0.81											4.61 ^a	4.40 4.27 ^b	
		③ 社会福祉学一般理論・原理論	180	4.46 ± 0.89													
		④ 社会福祉の主要概念	180	4.49 ± 0.82													
		⑤ 社会福祉における実践主体	178	4.45 ± 0.82													
		2. 社会福祉制度・政策	179	4.36 ± 0.70													
		① 社会福祉制度の概念	178	4.53 ± 0.75													
		② 社会福祉関連法	179	4.47 ± 0.80													
		③ 社会福祉制度を生み出す仕組み・要因	179	4.42 ± 0.82													
		④ 非公的セクターの意義と仕組み及び機能	179	4.20 ± 0.84													
		⑤ 国際的側面	177	4.07 ± 0.91	なし												
		3. 社会福祉の歴史	180	4.31 ± 0.75													
		① 社会福祉において「歴史」を学ぶ意義の把握	180	4.48 ± 0.86													
		② 現代の社会福祉を理解・把握するための視点からの逆照射	178	4.37 ± 0.79													
		③ 語られる(記述される)歴史の側面	175	4.06 ± 0.91	なし												
		④ 歴史における比較の視点	176	4.22 ± 0.86													
II 群：社会福祉専門職の基本にかかわる実践能力																	
		1. 人の尊厳と人権擁護の基本に据えた実践能力	180	4.45 ± 0.75													
		① 基本的人権概念の把握	180	4.56 ± 0.76													
		② 人権侵害概念と侵害状況の把握	180	4.61 ± 0.82													
		③ 人権擁護概念と擁護方法の把握	180	4.52 ± 0.84													
		④ 人権擁護概念と擁護方法の把握	180	4.56 ± 0.79													
		2. 利用者の意思決定を支援する実践能力	180	4.45 ± 0.73													
		① 意思決定の概念の意味と意義の理解	180	4.59 ± 0.81													
		② 権利としての意思決定の法的、倫理的根拠	180	4.51 ± 0.81													
		③ 「能力論」と能力支援の意味の方法	180	4.22 ± 0.89													
		3. 社会正義に基づいて広範な視野を有する実践能力	179	4.30 ± 0.89													
		① 正義及び社会正義の概念の把握	178	4.35 ± 0.95													
		② 正義の下位概念の把握(自由・平等)	178	4.29 ± 0.96													
		③ 反正義状況の把握	178	4.15 ± 0.96													
III 群：理論的・組織的なソーシャルワークの展開能力																	
		1. ソーシャルワークの理論や実践モデルを駆使した展開能力	177	4.41 ± 0.70													
		① ソーシャルワークの一般モデル	177	4.41 ± 0.73													
		② ソーシャルワーク理論の歴史	177	4.38 ± 0.83													
		③ ソーシャルワークの理論の歴史	177	4.34 ± 0.85													
		④ ソーシャルワークの実践モデル/アプローチ	177	4.38 ± 0.82													
		⑤ ソーシャルワークの一般的展開(過程)モデル	177	4.46 ± 0.76													
		2. 対象のレベルに対応したソーシャルワーク実践能力	177	4.40 ± 0.79											4.47 ^a	4.39 4.14 ^b	
		① ソーシャルワークの対象レベルの捉え方	177	4.41 ± 0.84													
		② 各レベルの対象特性の把握	177	4.38 ± 0.86													
		③ レベル特性に対応するソーシャルワーク技術特性の把握	177	4.32 ± 0.86													
		3. ソーシャルワーク基本技術群及び多様な介入レパートリーを有した実践能力	176	4.41 ± 0.79													
		① ソーシャルワークの基本技術の把握と実行力	175	4.45 ± 0.84													
		② ソーシャルワークの「方法」概念	173	4.42 ± 0.82													
		③ 関連技術群の把握と実行力	175	4.29 ± 0.87													
IV 群：多様な利用者へのソーシャルワークの展開能力																	
		1. 社会福祉の対象とその変化に対応したソーシャルワーク展開能力	179	4.28 ± 0.72													
		① 社会福祉における対象の理解	179	4.24 ± 0.74	なし												
		② 対象の変遷への理解	179	4.51 ± 0.81	4.60 >	4.42											
		③ 時代区分と対象論	177	4.25 ± 0.81													
		④ 福祉制度論と「対象論」の位置関係の把握	177	4.02 ± 0.87	なし												
		⑤ 福祉制度論と「対象論」の位置関係の把握	179	4.04 ± 0.84	なし			4.21 >	3.87								
		2. 人間の発達段階を理解しそれに対応した多様なソーシャルワーク展開能力	178	4.23 ± 0.80											4.30 ^a	4.17 4.03 ^b	
		① ライフサイクル・ライフコース・ライフステージ・生涯発達等の概念の把握	178	4.28 ± 0.81													
		② 発達課題・生活課題概念と、課題分析の方法と理解	178	4.28 ± 0.87													
		③ ライフイベント概念の把握	178	4.07 ± 0.87	なし												
		3. 問題群に対応した多様な利用者へのソーシャルワーク展開能力	179	4.41 ± 0.86													
		① 伝統的問題群の理解と対応法の把握	178	4.42 ± 0.86													
		② 新問題群の理解と対応法の把握	178	4.36 ± 0.96													
		4. 利用者に適した理論的アプローチによるソーシャルワーク展開能力	179	4.67 ± 0.83													
		① 支援の対象となる分野を理解する	176	4.38 ± 0.85													
		② 伝統的問題群および新問題群にある利用者に対応するための理論的アプローチの把握	177	4.36 ± 0.90													
		③ 社会福祉における利用者および対象認識	173	4.35 ± 0.87													
		5. 多様な生活の場に対応したソーシャルワーク展開能力	179	4.19 ± 0.85						4.06 <	4.36						
		① 生活における居住環境と各環境の生活の構造の把握	178	4.20 ± 0.87						4.14 <	4.47						
		② 生活における転居・移動・移行の概念と実態の把握	178	4.05 ± 0.92	なし					4.04 <	4.39						
		③ 生活の場に応じたソーシャルワークの実践方法の把握と実行力	178	4.26 ± 0.89						3.90 <	4.24						
V 群：実践環境に対応したソーシャルワークの展開能力																	
		1. 多様な実践の場の理解と場とにふさわしいソーシャルワーク展開能力	178	4.31 ± 0.83		4.35 >	4.21					4.37	4.39 ^a	3.83 ^b			
		① ソーシャルワーク実践の場の理解と実践方法の把握	178	4.22 ± 0.88		4.26 >	4.15										
		② 実践の場の組織構造特性	177	4.29 ± 0.91		4.32 >	4.19										
		③ 組織構造におけるソーシャルワーカーの位置・地位と実践の特徴	178	4.15 ± 0.95													
		2. 他職種・機関と連携できるソーシャルワーク展開能力	178	4.40 ± 0.86		4.45 >	4.28					4.43 ^a	4.55 ^a	3.85 ^b			
		① 連携・協働・チームアプローチ・ネットワーク概念の把握と実践方法の理解と実行	178	4.44 ± 0.86		4.50 >	4.33										
		② 施設・機関における組織内職種構成とその連携の実態の把握	177	4.37 ± 0.90		4.43 >	4.22										
		③ 施設・機関の組織外施設・機関とその連携の実態の把握	177	4.36 ± 0.89		4.42 >	4.22										
VI 群：実践の中で研鑽・研究できる能力																	
		1. ソーシャルワーク実践に関わる情報活用能力	179	4.10 ± 0.85	なし												
		① 情報活用に関わる情報リテラシーの理解と実行力	179	4.15 ± 0.87													
		② 情報の比較対照・検討能力	179	4.17 ± 0.91													
		③ 情報の比較対照・検討能力	179	4.11 ± 0.92													
		④ プレゼンテーション能力	179	4.11 ± 0.95													
		2. ソーシャルワーク実践の中で研鑽を深め、研究できる能力	179	4.05 ± 0.91	なし												
		① 実践水準の概念及び実践水準の把握方法の理解	178	4.04 ± 0.96													
		② 自己研鑽・外部研鑽機会の活用	179	4.04 ± 0.98													
		③ 研究の理解と研究手続き・手順の把握と実行力	179	4.01 ± 0.93	なし												

2) 属性・背景特性と妥当性得点との関連(表 5)

各群，中項目，および細項目に対する妥当性の回答と，回答者の属性・背景特性との関連を，Mann-Whitney または Kruskal-Wallis の検定により検討した。

その結果，V群「実践環境に対応したソーシャルワークの展開能力」において，V群の表す内容の関連科目教育に携わっている教員，および社会福祉士資格養成を担当している教員は，関連科目教育に携わっていない教員，および社会福祉士資格養成を担当していない教員よりも，この群の項目の妥当性を高く評価した。

中項目で見ると，「対象のレベルに対応したソーシャルワーク実践能力」(Ⅲ群の中項目 2) および「人間の発達段階を理解しそれに対応した多様なソーシャルワーク展開能力」(Ⅳ群の中項目①) は，学問的背景に社会福祉学を有する教員が，有していない教員よりも妥当性を高く評価した。また，「多様な生活の場に対応したソーシャルワーク展開能力」(Ⅳ群の中項目 5) 及びそれを構成する細項目は，大学院を担当していない教員は担当している教員よりも，妥当性を高く評価した。

細項目のうち，上記の群，中項目に含まれないものについて見ると，「社会保障・社会福祉の位置づけ」(Ⅰ群の中項目 1-②) は，社会福祉学を学問的背景に有する教員が，「社会福祉における対象の理解」(Ⅳ群の中項目 1-①) は，Ⅳ群の表す内容の関連教育科目に携わっている教員が，「福祉制度論と「対象論」の位置関係の把握」(Ⅳ群の中項目 1-④) は，社会福祉系科目担当歴の短い教員が，それぞれの細項目の妥当性を高く評価した。

3) 考察

(1) コア・カリキュラムの妥当性

コア・カリキュラムの妥当性に対する回答は，すべての群，中項目，細項目において平均得点が 4 点以上であり，いくつかの項目を除いてその得点が天井効果を示した。回答分布をみると，ほとんどの細項目において，「非常に妥当である」および「まだ妥当である」の回答が 80%以上を占めた。これらのことから，コア・カリキュラム(案)の群，中項目，細項目の内容的妥当性が確認された。

(2) 回答者の属性・背景特性と妥当性評価との関連

各群の表す内容の関連教育科目に携わっている教員および社会福祉学を学問的背景に有する教員は，関与度の高さから一貫して妥当性の高い評価を示すと予想されたが，多くの

群，中項目，細項目は，回答者の属性や背景特性に関係なく妥当性が評価された。

関与の有無で大きく違いが認められたのはV群であり，この群では中項目，細項目においても，V群の表す内容の関連科目教育に携わっていない教員および社会福祉士養成を担当していない教員が妥当性を相対的に低く評価した。この群で表す内容は，基本的なソーシャルワーク実践の理論を踏まえて，実践現場の個別の特徴に即した実践展開能力に関する者が多く含まれる。それゆえ，学部教育におけるコア・カリキュラムではなく，オプションとしての位置づけや，実践を行う中で，個別課題的に現場で習得することが妥当であると判断されたのかもしれない。

社会福祉学を学問的背景に持たない教員が相対的に妥当性を低く評価した項目は，ソーシャルワーク教育のコア・カリキュラムとして特化することに対する疑問が反映したのかもしれない。例えば，対象を個人だけではなく家族，集団，組織，地域といった視点で捉えることや，ライフイベントの概念で対象を捉えることは，心理学や社会学，精神保健学においても重視される概念である。これらは，対人支援に関する専門家教育に共通して理解することが求められる項目として区別される必要があることを表しているのかもしれない。

大学院を担当している教員は，多様な生活の場に応じたソーシャルワークの実践方法の把握と実行力（IV群の中項目 5）の妥当性を，一貫して相対的に低く評価した。大学院を担当している教員は，担当していない教員に比べてコア・カリキュラムに含まれるべき項目を厳しく評価している可能性がある。しかしながら，この中項目のみ，大学院を担当していない教員と比べて低い評価が行われた理由について考察することが困難である。この中項目は，利用者の生活環境の変化とそれに即したソーシャルワーク実践展開能力を習得することを表している。この個別性と実践性に関する内容は，学部教育におけるコア・カリキュラムではなく大学院におけるコア・カリキュラムに位置付けることが妥当と判断されたのかもしれない。

(3) コア・カリキュラムへの反映と今後の課題

本調査結果から，コア・カリキュラム（案）のすべての群，中項目，小項目が，代表性が保証される国内の社会福祉系大学教員において，一定程度妥当であると評価された。しかしながら，相対的に妥当性の評価が低かった項目，および属性や背景特性によって妥当性評価に差が認められた項目が確認されたことから，コア・カリキュラム（案）の項目精

選の余地はあり、その際には、これらの項目に着目して行うことで、その妥当性はさらに高めることができるかもしれない。

一方、今後はコア・カリキュラムの構成概念妥当性や基準関連妥当性の検討、および有用性の検討を行う必要がある。構成概念妥当性の検討は、その足がかりとなる検討を次節で触れるので、本稿では割愛する。基準関連妥当性に関しては、コア・カリキュラムを満たした教育を受けた学生の卒業時点、あるいは可能であればソーシャルワーカーとして実践に携わる際のコンピテンシー評価などと合わせて評価することで、予測的妥当性を確認することが必要となろう。

さらに、有用性の検証と合わせて、策定したコア・カリキュラムが教育においてどのように活用されるべきかについての検討も必要となろう。本調査で妥当であると判断した教員がこれらの項目を実際の教育でどの程度使用（反映）させているのか、意識して行っているのかは判断できない。コア・カリキュラムを教育実践においてどのように反映させるのかといったガイドラインや、その反映の程度をどのように捉えるかといった具体的方法論についても検討していくことが求められよう。

2. コア・カリキュラム(案)Ⅵ群の構成概念妥当性の検討

1) 項目間の相関

(1) 全項目間の相関

項目間の全体的な関係性を調べるために、コア・カリキュラム評価項目の全ての項目についての相関を調べてみることにした。その結果、最も低い相関係数の値を示した項目はⅠ群 2-②「社会福祉関連法」とⅥ群 1-③「プレゼンテーション能力」($r=.304$)であり、逆に最も高い値を示したのはⅤ群 1-②「各実践の場の組織構造特性の把握」とⅤ群 1-③「各組織構造におけるソーシャルワーカーの位置・地位と実践の特徴の把握」($r=.975$)であった。

全相関係数の平均値は $r=.572$ であり、全体として非常に高い相関をしめしている。特に、相関係数が $>.9$ 以上の値を示した組み合わせは上記以外では、「Ⅴ 2-① ライフサイクル・ライフコース・ライフステージ・生涯発達等の概念の把握」と「Ⅴ 2-② 発達課題・生活課題概念と、課題分析の方法と理解」($r=.903$)、「Ⅴ 1-① ソーシャルワーク実践の場の(種別の)理解と実践方法の把握」と「Ⅴ 1-③ 各組織構造におけるソーシャルワーカーの位置・地位と特徴の把握」($r=.906$)、「Ⅳ 3-① 伝統的問題群(貧困・疾病・家族関係・扶養・ケア・住宅・生活環境等々の理解と対処法(対応制度も含む)の把握)」と「Ⅳ 3-② 新問題群(労働・格差・犯罪・虐待・多文化、多人種等々)の理解と対処法(対応制度も含む)の把握」($r=.946$)という 3 つの組み合わせが見られている。

参考までに、以上のように各項目間の相関が高いことを確認するために、全項目の相関の状況について、相関係数 $r=.4$ 以上の相関係数を“*”に置き換えて、表 2-1「全項目の相関(>.4)」により示す。

(2) 中間項目間の相関

全項目の相関では、項目間の全体の構造をつかみにくいために、以下においては、表 2-2 により示される各中間項目(18 項目)に含まれる下位項目の平均得点を中間項目の得点として、中間項目間の相関関係を調べる。

統計量=Personの相関係数 “>.4”のセルを“*”で示す↓

表 2-2 中間項目の設定

群	中間項目	下位項目番号	下位項目名
Ⅰ群	1 社会福祉概念と理論	1-①	社会福祉の理念
		1-②	社会保障・社会福祉の位置づけ
		1-③	社会福祉学一般理論・原理論
		1-④	社会福祉の主要概念
		1-⑤	社会福祉における実践主体
	2 社会福祉制度政策	2-①	社会福祉制度の概念
		2-②	社会福祉関連法
		2-③	社会福祉制度を生み出す仕組み・要因
		2-④	非公的セクターの意義と仕組み及び機能
		2-⑤	国際的側面（国内社会保・社会福祉への影響要因）
	3 社会福祉の歴史	3-①	社会福祉において「歴史」を学ぶ意義の把握
		3-②	現代の社会福祉の理解・把握するための視点からの逆照射
		3-③	語られる（記述される）歴史側面
		3-④	歴史における比較の視点（日本と諸外国）
Ⅱ群	1 尊厳と基本的人権	1-①	基本的人権概念の把握
		1-②	人権侵害概念と侵害状況の把握
		1-③	人権擁護概念と擁護方法の把握
	2 意思決定の支援	2-①	意思決定の概念の意味と意義の理解
		2-②	権利としての意思決定の法的、倫理的根拠
		2-③	「能力論」と能力支援の意味の方法
	3 社会正義に基づく視野	3-①	正義及び社会正義の概念の把握
		3-②	正義の下位概念の把握（自由・平等）
		3-③	反正義状況の把握
Ⅲ群	1 理論を駆使した展開能力	1-①	ソーシャルワークの一般モデル
		1-②	ソーシャルワーク理論の歴史
		1-③	ソーシャルワークの実践モデル/アプローチ
		1-④	ソーシャルワークの一般的展開（過程）モデル
	2 対象に応じた実践能力	2-①	ソーシャルワークの対象レベルの捉え方
		2-②	各レベルの対象特性の把握
		2-③	レベル特性に対応するソーシャルワーク技術特性の把握
	3 多様な介入による実践能力	3-①	ソーシャルワークの基本技術の把握と実行力
		3-②	ソーシャルワークの「方法」概念
		3-③	関連技術群の把握と実行力
Ⅳ群	1 対象変化に応じた展開能力	1-①	社会福祉における対象の理解
		1-②	対象の変遷への理解
		1-③	時代区分と対象論
		1-④	福祉制度論と「対象論」の位置関係の把握
	2 発達段階に応じた展開能力	2-①	ライフサイクル・ライフコース・ライフステージ・生涯発達
		2-②	発達課題・生活課題概念と、課題分析の方法と理解
		2-③	ライフイベント概念の把握
	3 問題群に対応した展開能力	3-①	伝統的問題群の理解と対応法の把握
		3-②	新問題群の理解と対応法の把握
	4 対象出現に応じた展開能力	4-①	支援の対象となる分野を理解する
		4-②	伝統的問題群および新問題群にある利用者に対応するための
Ⅴ群	1 多様な実践の場理解	4-③	社会福祉における利用者および対象認識
		5-①	生活における居住環境と各環境の生活の構造の把握
		5-②	生活における転居・移動・移行の概念と実態の把握
	2 他職種機関と連携	5-③	生活の場に応じたソーシャルワークの実践方法の把握と実行
		1-①	ソーシャルワーク実践の場の理解と実践方法の把握
		1-②	実践の場の組織構造特性
		1-③	組織構造におけるソーシャルワーカーの位置・地位と実践の
	2 他職種機関と連携	2-①	連携・協働・チームアプローチ・ネットワーキング概念の把握と実践方法の理解と実行
		2-②	施設・機関における組織内職種構成とその連携の実態の把握
		2-③	施設・機関の組織外施設・機関とその連携の実態の把握
Ⅵ群	1 情報活用能力	1-①	情報活用に関わる情報リテラシーの理解と実行力
		1-②	情報の比較対照・検討能力
		1-③	プレゼンテーション能力
	2 研鑽研究能力	2-①	実践水準の概念及び実践水準の把握方法の理解
		2-②	自己研鑽・外部研鑽機会の活用
		2-③	研究の理解と研究手続き・手順の把握と実行力

以上のように、下位項目の平均得点により構成された 18 の中間項目間の相関について、表 2-3 に「中間項目間の相関」により示す。この相関表について、相関係数が $r=.7$ 以下の値の箇所を“■”で示すと、図 2-1「中間項目間の相関 ($r>.7$)」のようになる。この図からは＜Ⅰ群とⅡ群＞、＜Ⅱ群とⅢ群＞、＜Ⅳ群とⅤ群＞のそれぞれの群間に含まれる中間項目間に、相対的に高い相関が存在することを読み取ることができる。

表 2-3 中間項目間の相関

	Ⅰ群 1	Ⅰ群 2	Ⅰ群 3	Ⅱ群 1	Ⅱ群 1	Ⅱ群 2	Ⅱ群 3	Ⅲ群 1	Ⅲ群 2	Ⅳ群 1	Ⅳ群 2	Ⅳ群 3	Ⅳ群 4	Ⅳ群 5	Ⅴ群 1	Ⅴ群 2	Ⅵ群 1	Ⅵ群 2
Ⅰ群 1	1	.822	.801	.874	.867	.767	.732	.679	.720	.711	.643	.680	.688	.633	.652	.627	.547	.573
Ⅰ群 2	.822	1	.776	.765	.729	.668	.678	.621	.668	.679	.544	.601	.601	.616	.594	.519	.485	.460
Ⅰ群 3	.801	.776	1	.757	.765	.707	.682	.621	.645	.722	.583	.568	.643	.597	.598	.555	.496	.528
Ⅱ群 1	.874	.765	.757	1	.872	.780	.677	.693	.688	.664	.632	.692	.674	.602	.670	.658	.555	.546
Ⅱ群 2	.867	.729	.765	.872	1	.822	.721	.693	.714	.729	.685	.689	.708	.661	.695	.673	.622	.612
Ⅱ群 3	.767	.668	.707	.780	.822	1	.611	.651	.719	.684	.615	.647	.649	.658	.690	.582	.610	.604
Ⅲ群 1	.732	.678	.682	.677	.721	.611	1	.750	.766	.663	.617	.603	.651	.635	.621	.586	.535	.518
Ⅲ群 2	.679	.621	.621	.693	.693	.651	.750	1	.845	.619	.623	.608	.613	.564	.581	.567	.543	.497
Ⅲ群 3	.720	.668	.645	.688	.714	.719	.766	.845	1	.680	.641	.646	.647	.655	.707	.624	.589	.593
Ⅳ群 1	.711	.679	.722	.664	.729	.684	.663	.619	.680	1	.757	.711	.778	.712	.740	.688	.577	.576
Ⅳ群 2	.643	.544	.583	.632	.685	.615	.617	.623	.641	.757	1	.731	.727	.751	.678	.682	.595	.605
Ⅳ群 3	.680	.601	.568	.692	.689	.647	.603	.608	.646	.711	.731	1	.818	.717	.733	.723	.619	.577
Ⅳ群 4	.688	.601	.643	.674	.708	.649	.651	.613	.647	.778	.727	.818	1	.750	.782	.781	.633	.608
Ⅳ群 5	.633	.616	.597	.602	.661	.658	.635	.564	.655	.712	.751	.717	.750	1	.762	.664	.676	.686
Ⅴ群 1	.652	.594	.598	.670	.695	.690	.621	.581	.707	.740	.678	.733	.782	.762	1	.826	.674	.689
Ⅴ群 2	.627	.519	.555	.658	.673	.582	.586	.567	.624	.688	.682	.723	.781	.664	.826	1	.633	.602
Ⅵ群 1	.547	.485	.496	.555	.622	.610	.535	.543	.589	.577	.595	.619	.633	.676	.674	.633	1	.838
Ⅵ群 2	.573	.460	.528	.546	.612	.604	.518	.497	.593	.576	.605	.577	.608	.686	.689	.602	.838	1

	I 群 1	I 群 2	I 群 3	II 群 1	II 群 1	II 群 2	II 群 3	III 群 1	III 群 2	IV 群 1	IV 群 2	IV 群 3	IV 群 4	IV 群 5	V 群 1	V 群 2	VI 群 1	VI 群 2
I 群 1																		
I 群 2																		
I 群 3																		
II 群 1																		
II 群 1																		
II 群 2																		
II 群 3																		
III 群 1																		
III 群 2																		
IV 群 1																		
IV 群 2																		
IV 群 3																		
IV 群 4																		
IV 群 5																		
V 群 1																		
V 群 2																		
VI 群 1																		
VI 群 2																		

図 2-1 中間項目の相関 ($r>.7$)

上の図 2-1「中間項目の相関 ($r>.7$)」からは、I 群と II 群、II 群と III 群、IV 群と V 群の間に、相対的に強い相関を読み取ることができる。このような結果については、先に調べた全項目間の相関において、IV 群と V 群の一部の項目間に非常に高い相関が確認されていたこととも直接的に関連するものと考えられた。以上のような、項目間の相関及び中間項目間の相関の状況からは、内容が非常に近い項目が存在するか、または、明確に区分することが困難な複数の項目が存在する可能性を示していることが推測された。

2) 共分散構造分析による分析

下位項目の平均値からなる 18 の中間項目を観測変数とし、潜在変数として「社会福祉学」「基本にかかわる実践能力」「SW 展開能力」「多様な利用者への SW」「環境に対応した実践」「研鑽・研修の能力」および「カリキュラムの妥当性」を設定し、共分散構造分析

によりモデルの構成を試みた。その結果、図 2-2「コア・カリキュラムの妥当性」に示すようなモデルを得ることができた。このモデルの適合度指標については、CFI は.935 で比較的適合度が高くなっているが、GFI は.809、AGFI は.747 ということで全体としてモデルとしての適合度は十分なものではない。そのため、以下においては「コア・カリキュラムの妥当性」の評価がもつ意味についての予備的な分析を試みることにする。

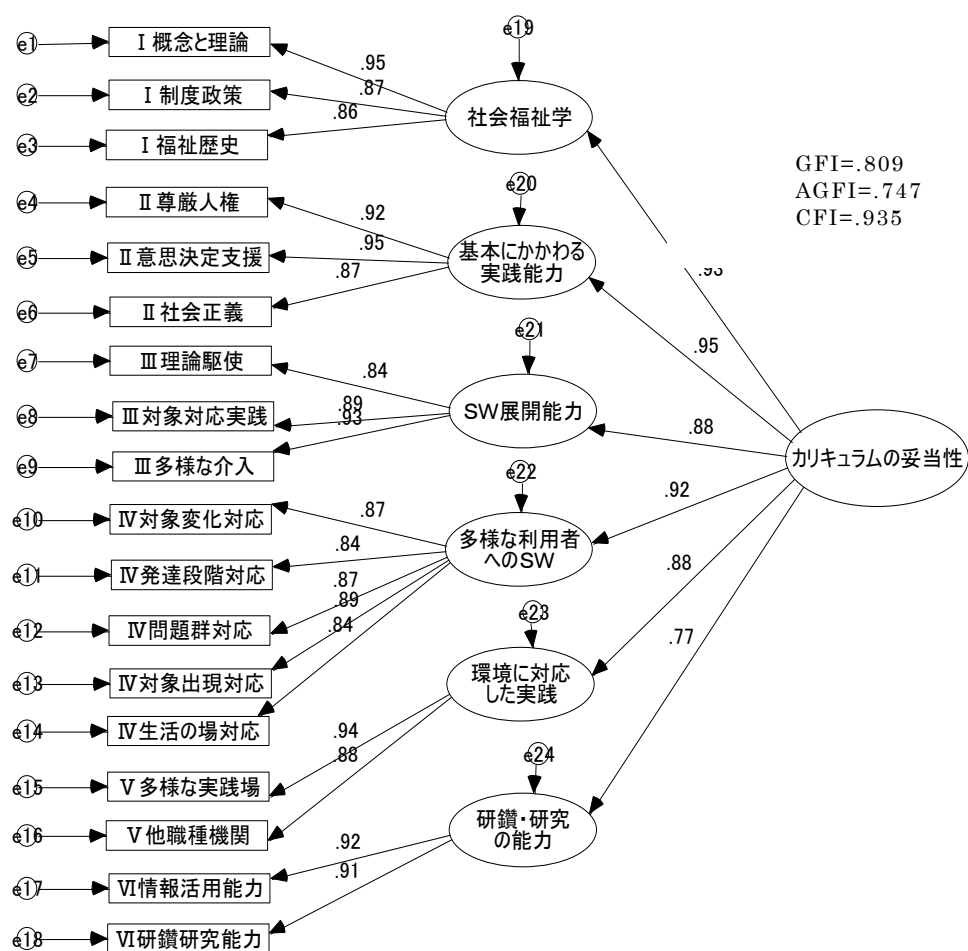


図 2-2 コア・カリキュラムの妥当性評価

SEM モデル「コア・カリキュラムの妥当性評価」について基本項目（60 項目）の総合得点を平均得点により評価の低い群（74 名）と評価の高い群（106 名）に分けてそれぞれ

の群ごとにモデルを適用してみるとそれぞれ図 2-3、図 2-4 のようになる。図 2-2 の「コア・カリキュラムの妥当性評価」と評価の総合得点が全体の平均以下である群をモデルに適用した図 2-3 の「評価が低い群のモデル適用」を比較して見てみると、「カリキュラムの妥当性」が「社会福祉学」「基本に係る実践力」に与える影響はそれぞれ $<.93 : .87>$ $<.95 : .90>$ であり、全体モデルよりも評価が低い群のモデルの方が僅かに小さくなっているが、全体としては大きな差は見られない。

これに対して、評価の総合得点が全体の平均得点以上である回答群をモデルに適用した図 2-4 「評価が高い群のモデル適用」では「多様な利用者への SW」へのパス係数が.82 と最も高く、次いで「環境に対応した実践」へのパス係数が.76 となっており、それ以外は「基本にかかわる実践能力」が.41、「研鑽・研究の能力」が.36、「社会福祉学」が.31、「SW 展開能力」が.30 となっている。これらは、総合評価が高い回答群では「カリキュラムの妥当性」が「多様な利用者への SW」と「環境に対応した実践」へ与える評価は多の項目へ与える影響より大きいことを示している。

すなわち、「カリキュラムの妥当性」が全体的に低い群では「カリキュラムの妥当性」が各潜在変数に及ぼす影響は「研鑽・研究の能力」へのパス係数が.81 で少し低くなっている以外は、全般的にパス係数は.86 から.90 の間で、全体的に評価が与える影響の差は小さい。それに対し、全体的に高い群では、とくに「カリキュラムの妥当性」は「多様な利用者への SW」と「環境に対応した実践」に対して比較的大きな影響を及ぼすものと考えられた。

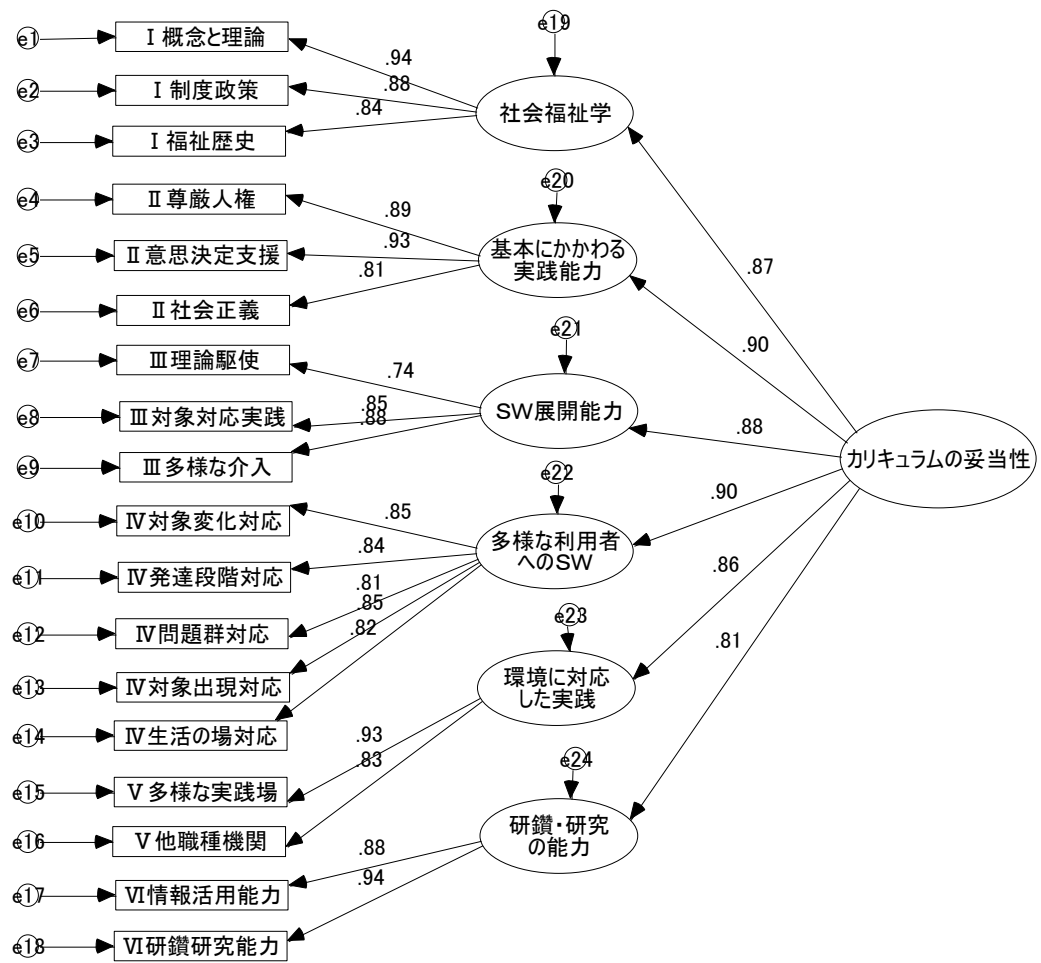


図 2-3 評価が低い群のモデル適用

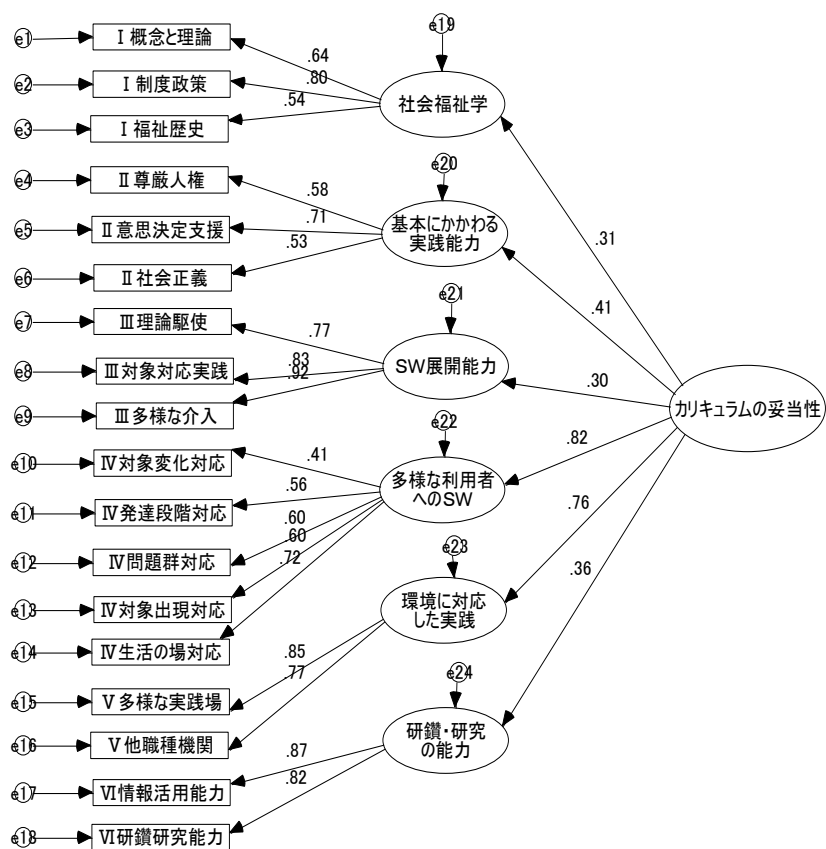


図 2-4 評価が高い群のモデル適用

3) 中間項目の因子分析による分析

はじめに、18 項目の中間項目について、主因子法による回転のない因子分析を行いスクリープロットの変化により因子数を 4 因子とした。次にプロマックス回転による因子分析を行い表 2-4「中間項目の因子分析」の結果を得ることができた。因子名については、第 1 因子は「社会福祉学」、第 2 因子は「SW 展開能力」、第 3 因子は「対象と環境に対応した実践」、第 4 因子は「研鑽・研究の能力」とした

このコア・カリキュラム中間項目の因子分析の結果について、共分散構造分析を行う事により、図 2-5「因子分析によるコア・カリキュラム妥当性モデル」を得ることができた。

このモデルは先にみた、図 2-2 の「コア・カリキュラムの妥当性評価」と比較すると GFI=.828、AGFI=.776、CFI=.946 であり、3 つの適合度指数で数値が高くなっている。

表 2-3 及び図 2-5 に示されるように、第 1 因子には I 群と II 群を構成する中間項目が含まれ、第 2 因子には IV 群と V 群を構成する中間項目がふくまれている。そして、さらに第 4 因子には II 群と III 群を構成する中間項目が含まれている。これらの結果は、図 2-1「中間項目の相関 ($r>.7$)」の説明で示したように、＜I 群と II 群＞＜II 群と III 群＞＜IV 群と V 群＞の各群間に相関性の高い中間項目が含まれることを意味している。

表 2-4 中間項目の因子分析

	第 1 因子 (社会福祉学)	第 2 因子 (SW 展開能力)	第 3 因子 (対象と環境に対応した実践)	第 4 因子 (研鑽・研究の能力)
I 群 1_平均	.963	.018	-.010	-.026
II 群 1_平均	.870	.075	.002	-.022
I 群 3_平均	.849	.016	-.015	.017
I 群 2_平均	.840	.016	-.089	.071
II 群 1_平均	.790	.064	.120	.014
II 群 2_平均	.643	.049	.189	.059
IV 群_4 平均	.069	.982	-.094	-.057
IV 群_3 平均	.079	.839	-.036	-.008
V 群_2 平均	-.024	.825	.078	-.023
V 群_1 平均	.014	.695	.208	.017
IV 群_2 平均	.012	.688	.039	.130
IV 群_1 平均	.271	.653	-.071	.045
IV 群_5 平均	.025	.594	.241	.050
VI 群_2 平均	.032	-.007	.951	-.040
VI 群_1 平均	-.029	.110	.792	.043
III 群 1_平均	.075	-.027	-.032	.897
III 群 2_平均	.062	.045	.076	.795
II 群 3_平均	.290	.140	-.054	.519

因子抽出法：主因子法。回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法。

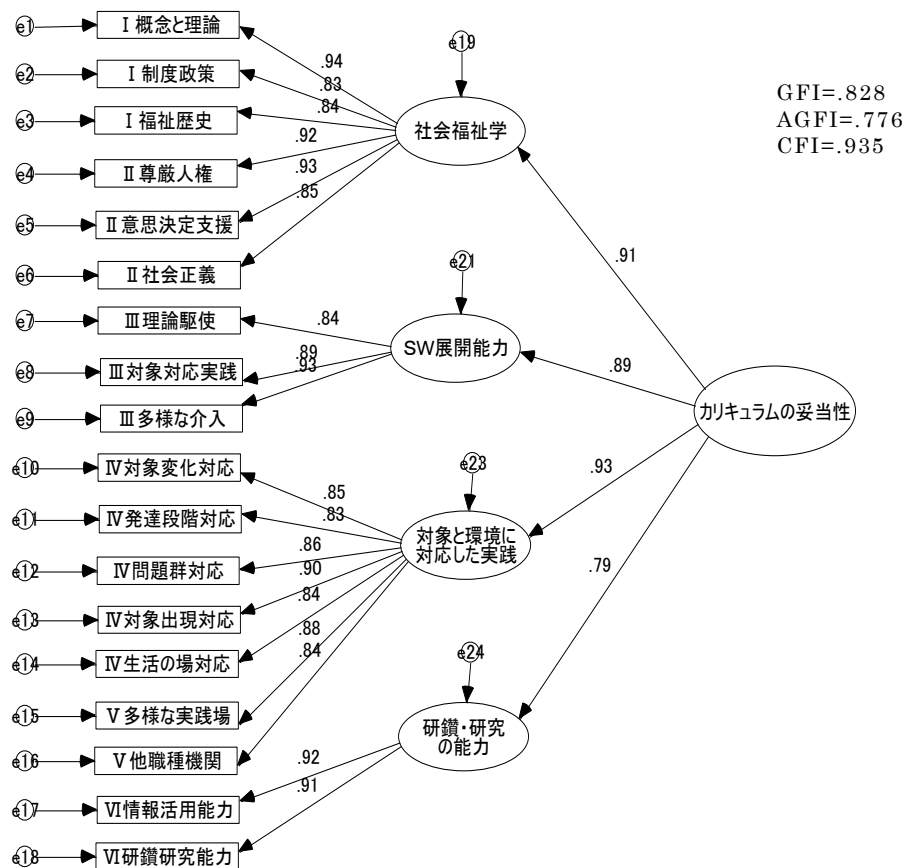


図 2-5 因子分析によるコア・カリキュラム妥当性モデル

4) まとめ

はじめに、全体的にコア・カリキュラムへの評価が高い群では、「多様な利用者への SW」と「環境に対応した実践」が相対的に重要な意味を持つのに対して、低い群では中間項目間で大きな評価の差異が見られないという点については、次のように解釈することが可能であろう。すなわち、もともとコアカリに対する評価が低い回答者群では、特別にこだわりをもつ項目が無いのに対して、全体的に評価が高い回答者群では、専門分野や授業での関わりにより、項目の評価に差がでてくるものと推測される。

次ぎに、各項目の評価については、全体的に非常に高い相関を示している。このことは、評価全体が天井効果を示していることが影響しているものと考えられた。また、コア・カリキュラム全体の相関の構造を把握するために 18 項目の中間項目を構成し、そこでの相関

を調べてみたところ＜Ⅰ群とⅡ群＞＜Ⅱ群とⅢ群＞＜Ⅳ群とⅤ群＞の各群間に相関性の高い中間項目が含まれることが明らかになった。さらに、中間項目の因子分析の結果からは「社会福祉学」「SW 展開能力」「対象と環境に対応した実践」「研鑽・研究の能力」という 4 つの因子が析出され、共分散分析の結果からは、調査対象である「コア・カリキュラム」における 6 つの群による分類の場合よりも 4 因子による分類の方が GFI、AGFI、CGI の適合度指数が上がることを確認されている。

以上の結果から、調査対象の「コア・カリキュラム」は、各項目の妥当性は確認されたものの、構成概念妥当性については、若干の課題を有するものと考えられた。特に、①相関係数が $r=.9$ 以上の項目をどのように取り扱うか、②＜Ⅰ群とⅡ群＞＜Ⅱ群とⅢ群＞＜Ⅳ群とⅤ群＞における中間項目間の高い相関の存在にどのように対処するか、③ 6 つの群による分類よりも、4 つの群による分類の方が「コア・カリキュラムの評価モデル」としての適合度指数が高くなることをどのように解釈するかといった問題について、今後十分に検討していく必要があるものと思われる。